

俳
句

青木敏行

(森の座)

ゆつたりと鷺の飛立つ稲田かな
地球裏の戦火の匂ふ蟬の穴
大鼓の一打一打や月渡る
鉢揚げ老いし売子や鬼灯市
荒強風や灰色重き護衛艦

阿部政子

平癒して真つ先畑へ花はこべ
竹筒の手水は細し花は葉に
取りたての野菜不揃ひ魂棚に
球児等よ八十路も校歌うたふ夏
墨の香の一句したため涼新た

安保淳子

(天為湘南)

水面に映りて揺るる菖蒲かな
雨宿りの軒先に揺る吊忍
昼飯の後の大の字三尺寝
蛸や酒屋の閉店貼り紙す
同窓の旅の要は河豚づくし

あや子

(みちくさ)

菊人形逢瀬の舞台御覧あれ
秋の声被曝者世界平和賞
軒並みや柿鈴なりの故郷よ
寺の鐘響く我街秋の暮
行く秋や幼馴染の逝く知らせ

生田 暁美

(はまべ)

ワンピース風吹きぬけて薄暑かな
頼朝のながめし池や通し鴨
静けさや啄木鳥森を耕せり
満月に差し出す指やドビュッシー
少年のけん玉の音冬の空

池野 隆

(天為湘南)

棟梁の杉の香纏ひ初仕事
黒潮の寄する島島フェリー往く
大空を星に譲りて去ぬ燕
食卓に小さき地球儀春の夢
病室の碁盤に注ぐ花明かり

石崎 玄舟

(一輩)

春風や赤べこの頭の揺れ止まず
残る蚊につきまはさるる古刹かな
木犀や退院の母髪を梳く
秋祭り社務の爺の茶碗酒
車座の自慢話や敬老日

石塚 佑伎子

八十路越え心たおやかシャボン玉
暮れる秋町の灯一つ二つかな
道の辺の小径狭める照紅葉
落葉松や落暉残して鳥渡る
一居の襖のぞくや風坊主

伊藤 梢

今井 美恵子

(波)

寒夕焼眺めるばかり遠き地震
さくらさくらよもう少しこの世に
水琴窟の星の響きや竹の秋
誘惑の蛍袋の白い闇
冬銀河まで街角のサキソホン

伊藤 美也子

(波)

恵方とは吾が行く道や雨上る
鬼は外歳とることも悪くない
本当は嫌ひじやないのヒアシンス
春惜しみ命惜しみて暮るるなり
秋櫻すでに暮色の中にあり

居山 勝

(天為湘南)

初蝶や空振二回猫パンチ
警策や蕾はぐるる蓮の朝
もろ手あげ風になりきる大花野
秋ともし節穴丸き柚の小屋
初明り社の龍の舞ふ構へ

岩谷明子

うさお

(冬すみれ)

春夕焼ころの隅に燃え残る
鶯草は小さき貴婦人風を聴く
法師蟬鳴けば夕風背中から
屋根たたく霰や夜のカンパネラ
過ぎし日へ汽笛の流る冬の海

植田裕子

占部美土子

(鶴沼かほちゃ)

鼻かむを笑ふ幼子冬うらら
春の昼抱く児ふはりと寝入りたり
幼よりつなぐ吾の手秋日和
かくれんぼう君の笑顔に木の実降る
初しぐれひとつの傘で児と駆ける

(はまぐ)

若竹やすくつと父の背丈超ゆ
黒髪を手櫛でたばね夏神楽
星月夜産声ひびき娘は母に
金秋や加賀友禅の筆さばき
妖精でゐてくださいね六花

江口文子

大久保啓子

(天為湘南)

植木屋の手さばき眩し松飾
春雪の囲碁打つ指の白さかな
夏帽子地元巡りの旅気分
母の忌を忘れかけたり茗荷の子
ウオーキング男の日傘板につき

(たけのこ)

春帽子歩けることに感謝して
窓開けて落花を両の手に受くる
ふらここの揺れに心の揺れなだめ
秋暑し意地悪婆になつてやろ
身に入むや写真の夫は笑むばかり

大木保幸

大山賢太

(みちくさ・かわせみ・かるがも)

田起こしや 目覚めと見えし 黒き土
ひと片に 解けて流る 花筏
杖ならぬ パークゴルフや 風青し
ビルの谷 音が人呼ぶ 秋祭り
竹春の 眩い巡路に 親子ゆく

虹目高青い尾鰭で泳ぎけり
百日紅滑り尻餅茶虎猫
朝の日に薄紅揺れる秋桜
山の端に淋しく咲けり吾亦紅
枯蟪蛄追われ追われてデイサーピス

岡本 泉

(鷹)

バスを待つ足踏小さき余寒かな
白萩や着ることもなき母のもの
一遍忌人のうしろを寛^{くろ}ぎて
夜に入りてスーパ―混みし残暑かな
海岸の奇岩の列や日の盛

加藤 静子

(はこべ)

落味噲のひと品あれば足る昼餉
ざんなんが隠れてゐたり空也蒸し
染めつけの鉢にゆらゆら冷奴
夏大根信州そばの香りかな
湯豆腐や身辺整理の話など

金井 詩子

(波)

筆始め龍より墨の匂ひけり
一羽来て二羽翔つ浮標^{フイ}の冬かもめ
打ち寄する波も一品夏料理
色変へぬ松や昭和の分教場
老脚の一步の遠き冬の駅

金 栗 トモ子

(サンシャイン)

二人静同性婚という形
戦争や葉裏に隠る毛虫焼く
流星の余白一丁目一番地
黒揚羽標本という磔刑
感動は小さくなりてちゃんちゃんこ

金 子 真悠美

(天為湘南)

足場取れ新築戸建に春日入る
惜春やいつしか古希のクラス会
白靴やテーパークを自由自在
友を待つ改札口や星祭
髪結ひて襟足涼し宵の星

金 田 美 保

(かるがも)

喜寿の秋鏡の中に母の顔
おなじかな孫と見る月アイパッド
十五夜になにを願うの吾子二人
敬老の手伝いをして恩送り
七五三曾祖母の晴着ひ孫まで

加野 庸子

(一葦)

おもむろに膝折る象や凍ゆるむ
促され膝すすめけり雛の間
しぐれ詠む心敬の碑も花のころ
阿夫利嶺の風に首振る葱坊主
星涼し鈍色に浮く潜水艦

神 谷 章 夫

(さくら)

逃げ水の逃げ損なひは蟹になる
本当は立ち疲れたる葱坊主
自然薯に癖なきもののなかりけり
水の辺の数珠玉に指とどかざる
釣糸の愁思のさまに放たるる

亀倉 美知子

梅ふむ佳きこと一つもうひとつ
下闇の奥社果てなき苔の磴
秋風や父母なき郷の沈下橋
ひよどりの声音夕日を染めにけり
初声や笈の水のいと眩し

川口 和子

(天為湘南)
花冷や楸紗に残るたたみ皺
青き踏む庚申塚に父祖の銘
見はるかす大庭御厨山若葉
牡丹咲く真紅の頁開きつつ
木簡の墨跡薄し雁の棹

河村 笑

(鷹)
開港の頃の絵ガラス晩夏光
読経の声の怯まずはたた神
実むらさき本気の色となりにけり
升^{のぼ}さんの驚きさうな大糸瓜
ゐのこづち取り合ふ間にも山暮るる

河村 青灯

(鷹)
火を囲むひとの性なり飾焚く
鱖散る老朽船の始動音
パーティーの歌声去りて水芭蕉
はらばへば秋の砂山温きかな
悴める手を包みたるおほきな手

草柳 節子

(天為湘南)
久びさに杖を友とし青き踏む
小春日やG線上のアリア聞く
花の下野球する子の声響き
稲妻の地をつき刺すを眺めをり
万緑やモツシーシの子十八才

小林 律子

(天為湘南)
初釜や主客華やぎ湯の滾り
糸つむぐ吉祥模様の手毬かな
雀らの音譜の如く秋の朝
十三夜過ぎゆく時の早さかな
雪の舞ふ闇夜に浮かぶ金閣寺

小林 美知子

(天為湘南)
夜の更けてこほろぎすだく山の宿
野の花の碧き色濃き秋日影
蟪蛄の死して今だに威嚇せり
大樹より声の落ちくる秋の蟬
昼下がりに草笛競ふ通学路

小堀 公美子

(鶴沼かほちゃ)
父の梳く母の白髪福寿草
採点の父の横顔春灯
地めだかの卵見にゆく祖父の家
くるぶしの木の瘤のごと遊行の忌
山茶花よ老ゆるごと澄む母の眼よ

小松原 キイ子

(一華)

春炬燵付箋あまたの旅冊子
カラフルに活けてひとりの薔薇の部屋
万物の火照りの余韻百合匂ふ
祈ること多き八月ちぎれ雲
新盆や友の墓標のありがたう

小山 美穂

(みちくさ)

浮かれ猫ニャンプロしては戯れぬ
蛇出でしミイアキャットがたたきおり
猫の恋シャーチョンチョン猫二人
雪しろの道を踏み踏み歩む道
薄氷とつつき割りて輪をつくり

齊 藤 久美子

(天為湘南)

里山の一本道や秋の声
山門を潜りし先や照紅葉
木枯や屋台の主一人きり
母の日の肩たたき券セピア色
夏野菜ゴロッと入れて我が家流

齋 藤 まり江

(波)

よそゆきの顔の集まる初句会
菜の花の香り溢れる吾妻山
鬼灯市粋な売り子の豆絞り
同じこと問うて答えて秋暑し
落葉踏むふわりと沈む靴の底

齊 藤 義 昭

(天為湘南)

涼風の吹きぬく土間の広さかな
満月よ雲をはじきて輝けり
おぼろげな記憶の中の草の笛
あぜ道の百円均一春野菜
柔らかな日差しと共に雛納

佐 藤 美津子

(天為湘南)

正月やビルの谷間の江戸巡り
三姉妹米寿喜寿の雛まつり
地の揺れて柵田の亀裂蓮華草
大杉の樹齢千年蟬時雨
名月や山合ひの宿酒一合

坂 本 キミヨ

(波)

坪畑は婆が遊び場花えんど
放物線えがく投網や雲の峯
焼酎に酔わせて柿の渋を抜く
あかときを差し交う雲や冬に入る
時雨るるや鳥を縁どる街路燈

篠 田 清 秋

秋暑し保護犬里子迎え入れ
冬立つや犬は地域をパトロール
サンタから犬にケーキのプレゼント
冬の浜江の島めぐし走る犬
子も犬も青空の鯉ながめけり

島田昌子

清水 誠

(一葦)

貨物列車夏雲いくつ越え行くや
井月の瓢箪軽し秋の風
野晒しの角なき墓やそばの花
網棚にリユックはみ出す豊の秋
二才児の通訳七才鳳仙花

初夢はなお他人のため八十路越え
難関を超えて学び舎桜咲く
ともかくも耐えて忍んで炎暑かな
吾ここに開いて薫る金木屋
冬ざれや妻亡き友と趣味談義

清水和徳

四郎

(天為湘南)

数独やつり剥けたる衣被
新藁を挟み渡さる中也の詩
傾ぐ日と競ふがごとく晩稲刈る
巻貝の殻十月の砂零す
秋の声流れ着きたる空瓶に

幹裂けて神代桜迫りけり
ぶつかりて汗が飛び散る大一番
アロハにも似合ふ年ごろ似合ふ場所
どき湯さと津軽の人や今朝の秋
ゴンドラの眼下は秋のグラデーション

鈴木絹子

栖原 由美子

(冬すみれ)

五月雨や借りれば重き男傘
立ち上がる入道雲の拳かな
夏の蝶はがき一葉戻りくる
古寺の笑う羅漢や散松葉
どんぐりや遊ぶ幼のひとり言

(鷹)

秋澄めり露天にひさぐ打刃物
山茶花や単線駅の時刻表
夢十夜また読み返す春の風邪
耕人のはたく袖口土匂ふ
太鼓橋渡る神輿の氣勢かな

鈴木 千枝子

角 和富

(天為湘南)

夜業の灯掲げ火急の道普請
台風過始発電車の長きベル
鈴の音の風に乗りたり秋遍路
国境をたやすく越ゆる草の絮
こぼれ萩飯盛女の墓朽つる

市役所の横の日当たり帰り花
フルートの音色にひらくアマリリス
行秋や人それぞれの選挙かな
あきらめの必となりし老いの秋
五年ぶりプールに浮かび息を吸う

関 美 晴

高 久 弘 行

(波)

桔梗やむかし富山の葉売り
柿日和声の通りのよき日かな
金秋や雙十節の路地に旗
どんぐりや幼き我を拾う森
輪島塗拭えぬくもり雪しんしん

草 心

田 中 素 子

(天為湘南)

初耳の松虫の声闇透ける
知らぬふり敬老の日の思いやり
夏空やミント葉入れた白湯を持ち
一斉にどくだみの花道白し
災害の無い時はなし愛の羽根

父母^{ちちは}も夫も見し海初日の出
桜蕊降る橋のたもとに時流れ
花にらの星ふるごとく咲く真昼
傘寿なる今年の色の新松子
冬の日や天目茶碗の黒びかり

手 塚 智 之

栃 尾 ま ほ

(みちくさ)

一人行く長野安曇野花野原
匂い立つ七月の庭草むしり
国旗立て気持ち新たに文化の日
目深だがあれは妻だよ冬帽子
節分会誰が鬼やら福は内

畑なきワイナリーにも秋深む
花野道循環バスをひとり待つ
木の葉飛ぶ人波の間をすり抜けて
秋澄むや諸国行脚の一遍さん
遊行寺の山門しぐれ古道めく

常 盤 貴美子

富 田 誠 子

(冬すみれ)

行方問う声冬ざれの震災の町
山路過ぐ風も八十八夜の香
昼顔や砂の文字消す波の音
オルガンの静かな祈り初時雨
火の匂う鯛焼の餡ほくほくと

風鈴や郷愁さそふ軒の風
ちぎれちぎれの郷愁浮かぶ秋の雲
黄葉散りて庭に生まれししづ心
八十路越え感謝の心虫の声
島渡るあかねの空の色の中

内藤 繁

(天為湘南)

初富士や一市に五基の芭蕉句碑
蝶舞ふや旧街道の宿場町
義経の首流れ来て藤の花
木槿咲く乗馬クラブに馬術部に
名月や弁天奏する波の音

永井 かほる

(波)

切株に座すや冬日の只中に
落茹でし湯気に昭和の香りして
筍飯嫁の塩梅かみしむる
生家なる日の燦燦と梅を干す
鉄線花夫の木椅子の空きしまま

永塚 享司

野分来るスマホに避難指示の文字
櫟葉の黄ばみて何れ散らんとす
窓開ければ金木犀の香が鼻に
帯解きの吾子ほんのりと口に紅
炬燵出す出さないで一悶着に

中根 美保

(一華)

園児らに手を振り返し冬うらら
海市消ゆ隠し扉のあるごとく
新涼や粘土にしるき子の手形
羊歯くぐる水音秋のこゑとなる
窓大きチヨーク工場小鳥来る

西野 洋司

(つぐみ)

恋の猫井戸に墜ちしは過ちか
寒晴や光輝く屋根瓦
鎌倉も此処古き谷戸笹鳴ける
四月馬鹿真逆背骨が折れるとは
ホーホケキヨ朝寝染しむ妻なるぞ

能勢 マサ子

(天為湘南)

夕景の水田飛び交う夏燕
宅配便友の顔似のトマト着く
夕闇の水田乱舞の蛍狩り
里芋の皮むく祖母の手の黒さ
隠れ鬼芽を掻き分け秘密基地

原田 稔

石楠花や庭を飾りて天仰ぐ
五月晴れ自転車乗れて孫破顔
相模川流れゆつたり芒かな
秋の田にボンと佇む三県境
扇子持迫力溢るねぶたかな

平岡 法子

(冬すみれ)

向かひ風落葉舞ひくる散歩道
てふてふが後先に舞ふ昼下がり
緑陰をひと区切りとし歩むなり
百日紅咲きまた咲きて賑やかに
終戦忌世界平和を希求する

廣 崎 龍 哉

(二葦)

初富士に一朵の雲も無かりけり
新聞を斜め読みして啄木忌
尺取虫の枝先にきて枝となる
京洛の闇に浮かべる大文字
花八つ手元素記号の如くにて

福 田 善 吉

(冬すみれ)

江ノ電とカヌー並走日焼け浜
水平線沸き立つ雲や夏の果て
弥陀仏の裾の木目や秋の風
箱根路や老舗旅館のとろろ飯
秋の虹明日はいいことありそうな

藤 森 巴 芹

(天為湘南)

屋上にゴジラが潜む朧かな
新松子空家の続く三丁目
脱走の癖ある猫や夕月夜
散歩する幼の手には小判草
色街の尾曲猫や後の雛

船 旅 遥

(天為湘南)

能面の妖しきまなざし秋の月
ちちろ鳴く白き句帳に乾く筆
遠き日の母のささくれ林檎の香
薄氷を透かして見ゆる歪みの世
車駆る五月の風を運ぶため

堀 口 みゆき

(鷹)

花の雨クリアファイルを濡らしけり
着信音大噴水の綺羅の下
午報鳴る楡の葉蔭のハンモック
境内の響く太鼓や蟻の列
かなかながかなかなを呼ぶ櫛に

馬 来 まち子

菜園の主のごとく葱坊主
星空をかき混ぜてをり今年竹
揺り椅子に本伏せてあり敬老日
とびの輪のだんだん高く新松子
長鳴きの牛の涎や秋深む

見 上 都

(鷹)

杉菜萌ゆ本家の嫁がトラクター
亀鳴くや道綱の母名を残し
寝静まる葉桜の町旗日かな
花虻や切り株あらばひと休み
玲瓏と富士に朝日や青楓

宮 川 敏 江

(波)

伊那にひと伊那に酒あり井月忌
随分と昔の話なんぢやもんぢや
薄墨の便り投函半夏生
煤の梁太し柚味噌の川魚
このみちはみんな行くみち白秋忌

宮 永 武 彦

(サンシャイン・はまべ)

さよなら履歴書ボンボンダリア咲く
よく来たね頬いっぱい柿を剥く
たまごサンドのたまごたっぷり冬に入る
コロッケや母の心の形して
入りてなお空深く染め秋の日は

村 木 勢 子

伊豆七島五島の見ゆる吊し雛
指圧師の痛気持いい万愚節
漏電なしで終る点検秋晴るる
書き上がる道路白線秋澄める
朝の水和紙の淡さの冬さうび

森 本 明 美

声弾む昔乙女の歌留多会
寺詣寒九の水に清められ
母の雛その又母の雛飾る
客を呼ぶ島の店先アロハシャツ
朝顔の寄辺なき蔓風のまま

柳 生 恵 子

(天為湘南)

相輪へ鳶の一差し実朝忌
荒畑に一枝蠟梅人寄せり
母衣背負ふ関の声秘む熊谷草
花田植眼の定まらぬ飾り牛
闇夜にも砧打つ音のいよよ澄み

村 松 麻由美

(湘南アカデミア)

秋つばめ空つばの巣に風が吹く
A線のバイオリンの音秋澄めり
虫の音や独りページをめくる夜
新涼や開けし窓よりピアノの音
秋の海もの想う人ちらほらと

森 田 順 子

雲うすく凍て月の上を流れゆく
春一番新しき帽おさえつつ
留守番の娘に残しおく桜餅
爽やかや伊豆大島も江の島も
退院や十葉の花目にやさし

柳 井 仁

(慶応義塾湘南藤沢高等部)

空蟬や地藏の笠に爪たてり
墨汁をぶちまけたごとと蝌蚪の群れ
単線の一人旅なりソーダ水
秋高し足場組む音遙かなり
風車タタタタタと客を呼ぶ

山 口 愛 子

(サンシャイン)

麦秋のジャズの流れてパン焼けて
仏壇の三つの位牌雁渡し
近道は坂道スニーカーは白
独り居のつくづくひとり夜の長き
芒原行けるとこまでこの杖で

山下 巖

引き潮や想ひ出攫ふ夕月夜
秋ぐもり想ひ出だけに続く小径
逃げ水や冥界からのメッセーじ
さしのべる手は闇つかむ青葉木菟
村娘祭りの夜の化粧水

山下 遊児

(渡)
さえずりを翻訳すれば相聞歌
たまらんわ息をするのに汗かいて
月今宵よき湯よき酒よき女房
恋をせんポインセチアの赤ほどに
湯豆腐が肩を揺らして唄い出す

山田 節子

花吹雪光る礫となりて舞ふ
香りのせ走り茶の針ほどけゆく
今年竹高く高くと青空に
爽涼や神木の幣新しく
白詰草ノートに挿む佳き思ひ

山田 貴世

(渡)
風吹けば風にじゃれおりねこじやらし
この道は好きな道なり草の花
花蘇鉄時宗遊行寺総本山
掃きしあと散りし紅葉はそのままに
虫すだく一叢の草抜かでおく

吉田 和子

(はこべ)
菜の花やしみじみ齡思う日々
せせらぎの闇深くして螢の火
海よりの風心地良し庭花火
面影を重ね旧知の賀状読む
白と言う無垢なるキルト冬日向

凌

(サンシャイン)
人形を抱けば おびただしき 桜
いつのよのはなもりならむ うしろむき
着流しで来よ あかつき 花に乗って来よ
今生も 後生もはなびら 微熱せむ
一点鐘 二点鐘かな はなふぶき

吉田 半夏生

(サンシャイン)
鬼の子やスマホ抱える人嫌い
芋の露無事を折りて健診日
細々に踏まれし紅葉九十九折
神送夕陽が神に路つくる
香水のスクランブルする渋谷かな

渡部 有紀子

(天為湘南)
一斉に紙裏返り大試験
コミックと中公新書春炬燵
一木を彫つてみほとけ山笑ふ
歪みつつ出でてまん丸石罅玉
口中を転がる飴や涅槃西風

第一三〇回市民俳句春の大会

令和六年四月二十八日、藤沢市民会館第一
展示集会ホールにて開催。

応募者一二四名、当日の参加は一二一名。

講演 伊藤伊那男氏（「銀漢」主宰）

―井上井月とその時代―

入賞作品

〇市長賞

古市 シゲ子
うららかや川の底まで日がさして

〇市議会議長賞

佐藤 享子
折鶴のどこもとがりて春の風邪

〇教育委員会賞

松坂 真理子
全身で春へ漕ぎ出す三輪車

〇俳句協会長賞

山田 せつ子
花筏たぶんとかばの背に回る

〇協会賞（以下同）

中根 美保
海市消ゆ隠し扉のあるごとく

畑 昌子
をんどりの蹴爪の光る春の土

山下 遊児
あるだけの風を集めて初蝶来

伊藤 美也子
分度器に記す名前や進級す

寺田 篤弘
肩の花たがひに払ひ別れけり

山田 貴世
ふらここや夜は風の子に明け渡し

川路 ゆさ
いつせいに鶏冠動く春の雷

矢口 美都子
ふるさとへ渡る鉄橋鳥雲に

佐野 恋蔵
ものの芽の雨ならば雨仰ぎをり

岩谷 明子
紙で切る指一瞬の余寒かな

鈴木 絹子
茎立や大目に見ればまだ青春

濱田 聡子
故郷の春はここから路の臺

清水 和徳
へぎ蕎麦を打つや越後に春の来て

水沼 富子
田起こしや土黒ぐろと水を打つ

上川 謙市
芽吹きつつ櫛伐られてしまひけり

神谷 章夫
初蝶のやうにひかりの海に出づ

宮澤 進
踏青や口数戻る試歩の妻

戸恒 東人
人麻呂も赤人もゐる春野かな

渡部 喬
妻すでに海市の中の客となる

千葉 民子
のどけしや鮎む牛のよだれ地に

福田 善吉
手を握るだけの面会花曇

常磐 喜美子
永き日や地球儀ゆるり回し居り

前田 弘子
立ち上がれ踏ん張れややこ草萌ゆる

大平 雅芳
ふらここを小さく漕いで返書読む

原山 テイ子
うららかや百歳めざし布を裁つ

鹿野島 孝二
暖かし島に医師来る月曜日

西室 登
卯波寄す白線長し相模灘

霧野 萬地郎
母子草忘れる過去と残る過去

第四十九回一遍上人忌俳句大会

令和六年九月十六日、時宗総本山・藤沢山清
浄光寺（遊行寺）大書院にて開催。

参加者七十八名、事前応募句による参加は
一三四名。

講演 岩田由美氏 「秀」同人・「青麗」会員

―田中裕明の俳句、その魅力―

応募句の部 入賞作品

○遊行寺賞 鈴木 千砂

どの向きの風も厭はず猫じやらし

○青木賞 中根 美保

新涼や粘土にしるき子の手形

○北澤賞 湯澤 誠幸

遊行忌の月に明るき膝頭

○市長賞 常盤 貴美子

大向日葵枯れて重さの残りけり

○協会長賞 廣崎 龍哉

行く雲も流るる水も一遍忌

○協会賞（以下同） 太田 うさぎ

蝸に漂白されて今日終る

上川 謙市

遊行忌のこの青空へ吸はれゆく

松坂 真理子

秋澄めり水を四角に和紙の里

中村 みき子

間引き菜の土塊しかと一遍忌

大坪 正美

足跡はみな捨ててゆく一遍忌

小松原 キイ子

故郷は変はらぬ匂ひ星月夜

智久 薫子

遊行忌の草満ち満ちて吹かれをり

点描となりつつ風の吾亦紅 山下遊児

生家なる日の燦燦と梅を干す 永井かほる

天牛をさいと鳴かせて野にかへし 小堀公美子

加野哲朗

秋の聲 遊行寺坂で立ち止まる

しんがりはをどる比丘尼や一遍忌 堀口みゆき

姫の墓名馬の墓や小鳥来る 富山ゆたか

合掌の身代り地蔵木の実降る 宮沢久子

単線の了ひは岬月見草 野木桃花

この影はステゴサウルス夏木立

遊行忌の下がりつつ掃く箒かな 土屋幸代

小さき手に寺の束子や墓参 堀口知子

当日句の部 入賞作品

○遊行寺賞

秋の聲聞く一遍の前かがみ 田口風子

○青木賞

羊歯くぐる水音秋のこゑとなる 中根美保

○北澤賞

秋声や日限地蔵の大き耳 今井美恵子

○市長賞

秋声や坂に小さな水たまり 北本佳子

○協会長賞

どの窓を開けて聴かうか秋の声 堀口みゆき

○協会賞（以下同）

秋の聲 擦れあふ鯉の傷つかず 太田うさぎ

秋の聲 聞かむと水面見つめをり 西野洋司

手を入れてみる新涼の手水鉢 野木桃花

秋の聲 流れ着きたる空瓶に 清水和徳

傘の寄り傘の離るる秋の窓 夏野猫宙

遊行寺のどこ歩いても秋のこゑ 加藤いろは

風咬みの竹林を梳く秋のこゑ 川路ゆさ

僧走る秋の驟雨となりにけり 田口茉於

秋の聲 遊行寺坂で立ち止まる 高村七子

秋声や雨傘細く巻きて去り 高橋純子

寺と家と混みあふ坂や渡り鳥 上野犀行

一遍忌横降りにまた糠雨に 山西雅子

渡り廊下かすかに軋む秋の聲 酒向昭

秋蝶過ぐ渡り廊下に人待てば 橋爪きひえ

遊行寺の大屋根越えて秋の聲 高瀬俊次

古き墓に塔婆わづかや秋の聲 前田恵美

目を細むひざり地蔵や秋のこゑ 畑昌子

開山忌了へし伽藍に秋の聲 鹿野島孝二

第二三一回市民俳句秋の大会

令和六年十月十四日、藤沢市民会館第一展示
集会ホールにて開催。

応募者一二九名、当日の参加は一一三名。

講演 堀田季何氏（「楽園」主宰）

―地球俳句―

入賞作品

○市長賞 鈴木 絹子

蓑虫や一人が好きなまま老いぬ

○特別賞 高野 尚志

鰯釣の夕日まみれとなりけり

○特別賞 山田 貴世

この道は好きな道なり草の花

○市議会議長賞 畑 昌子

持ち替へる傘の重さや終戦日

○教育委員会賞

子鼠の飛び出す絵本秋ともし

○俳句協会長賞

星祭キルトを綴る糸と針

○協会賞（以下同）

丹波栗兄の大きな字で届く

山 下 遊 児
かなかなの日を畳むかに鳴きにけり
居 山 勝

星降りて点す千基の絵灯籠

蒲 谷 トシ子

ふるさとの秋の抽斗あけてみる

篠 原 広 子

秋薔薇人待つ椅子に浅く座し

中 根 美 保

吊橋を落とすごとくに葛を刈る

永 井 かほる

大根の畝のふかぶか農継げり

霧 野 萬地郎

手びねりの皿に落ち着く零余子かな

齋 藤 まり江

同じこと問うて答えて秋暑し

村 上 和 子

水引や風呼び風に紅こぼし

吉 本 史 子

蚯蚓鳴く地震に怯ゆる秋津島

前 田 恵 美

衰へて川に流るる秋日かな

川 路 ゆ さ

携帯にひぐらしの声妣のこゑ

森 本 明 美

思い出は夜長の母の鼻めがね

鈴 木 千枝子

銀漢の零れ落ちたり九合目

大久保 啓 子

芒野へ迷子の私さがし行く

小松原 キイ子

子鼠の飛び出す絵本秋ともし

小 堀 公美子

星祭キルトを綴る糸と針

古 市 シゲ子

丹波栗兄の大きな字で届く

山 下 遊 児

かなかなの日を畳むかに鳴きにけり

居 山 勝

星降りて点す千基の絵灯籠

蒲 谷 トシ子

ふるさとの秋の抽斗あけてみる

篠 原 広 子

秋薔薇人待つ椅子に浅く座し

中 根 美 保

吊橋を落とすごとくに葛を刈る

永 井 かほる

大根の畝のふかぶか農継げり

沢 田 敦 子

兄ともつと話したかつたつづれさせ

山 田 せつ子

刃を当てて西瓜思はぬ方へ罅

伊 藤 美也子

筒茶碗二つ伏せ置く秋暑かな

佐 藤 亨 子

手を握るだけの見舞や桐一葉

高 瀬 俊 次

盛り場の路地にかそけき昼の虫

川 畑 薫

夫の眼鏡掛ければ夫の秋思かな

前 田 弘 子

一間づつ月の暈となりゆける